



Data

監督・脚本：ポール・グリーングラス

出演：マット・デイモン／トミー・リー・ジョーンズ／アリシア・ヴィキャンデル／ヴァンサン・カッセル／ジュリア・スタイルズ／リズ・アーメッド／アトー・エッサンダー／スコット・シェパード／ビル・キャンプ／ヴィツェンツ・キーファー／スティーヴン・クンケン

👁️👁️ みどころ

国家の安全のためには、個人情報の収集と管理が不可欠だが、他方で、プライバシーの大切さは？各地でテロが続発し国家間のサイバー戦が激化する中、国家の安全 v s プライバシーというテーマが急浮上！そんな時代状況を受けて、『ボーン』シリーズの新作の必要性が急浮上してくることに・・・。

本作では、新たに登場するCIA長官、サイバー専門の美人エージェント、凄腕の作戦員という3人のキャラに注目しながら、そんなテーマをしっかり考えたい。

そしてまた、セリフがたった20行しかないという主人公ジェイソン・ボーンの強い意思力と行動力をタツプリ楽しみたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■まずは『ボーン』シリーズの再確認を！■□■

原題、邦題とも『ジェイソン・ボーン』と題された本作は、21世紀への突入後にアクション映画の新たな金字塔を打ち立てた『ボーン』シリーズの新章。マット・デイモンが主演した『ボーン』シリーズの第1作『ボーン・アイデンティティー』（02年）（『シネマルーム2』120頁参照）、第2作『ボーン・スプレマシー』（04年）、第3作『ボーン・アルティメイトム』（07年）（『シネマルーム16』170頁参照）の計3部作はそれぞれサブタイトルがつけられていた。第3作から9年後の今、最後の(?)『ボーン』映画がつくられたのは、SNS（ソーシャル・ネットワークキング・サービス）の広がりや「スノーデン事件」に象徴されるようなネット環境の大きな変化の中で「国の安全 v s プライバシー」という重要なテーマが新たに急浮上してきたため。つまり、何が何でも『ボーン』シ

リーズでそんなテーマの新作をつくるべきだと判断されたためだ。また、タイトルを『ジェイソン・ボーン』とシンプルにしたのは、本作をマット・デイモンが主演した『ボーン』シリーズ3部作の集大成とするためだ。

他方『ボーン・レガシー』（12年）は『ボーン』シリーズと同時進行する陰謀を描くものだったが、主人公はジェイソン・ボーンではなく、主演もマット・デイモンではなくジェレミー・レナーだった（『シネマルーム29』162頁参照）。本作のパンフレットのラストには、ジェイソン・ボーンを中心として第1作から本作へと続くストーリーの流れが整理されているので、その復習と再確認をお忘れなく。

現に本作冒頭は、第2作『ボーン・スプレマシー』で登場した元CIA職員ニッキー・パーソンズ（ジュリア・スタイルズ）がアイスランドのレイキャビクにあるCIAの秘密施設に侵入し、CIAのサーバーへハッキングを仕掛けてくるところからスタートするので、それに注目！ニッキーはCIAの最高機密ファイルのダウンロードに成功したが、その中にはCIAが過去に行った「トレッドストーン計画」とそれに続く「ブラックブライアー計画」の資料が含まれていたらしい。万一それが公に漏れることになれば大変だ。過去の『ボーン』シリーズを再確認した後、いかにも今風のハッキング事件から始まる本作の導入部に、まずは注目！

■□■老練なCIAの新長官に注目！■□■

22作も続いた『007』シリーズは「スペクター」という究極の敵は存在するものの、1作毎にテーマが変わるし、ジェームズ・ボンドを演じる俳優も代替わりしてきた。しかし、マット・デイモンが主演した『ボーン』シリーズ3部作とそれに続く本作は、ストーリーは一貫しているうえ、登場人物も入れ替わりはあるものの、それは死亡等による必然的なものだ。第1作で登場したボーンの恋人マリーは殺されてしまったままだが、今さらボーンの恋人は物語構成には不要……。

『ボーン』シリーズの基礎ストーリーは、CIAの「トレッド・ストーン」計画によって暗殺者になることを志望したボーンが、同じくCIA職員だった父親の死亡を含めて実はCIAに騙されていたことに気づいた後、CIAに対して牙を向けてきたため、CIAとボーンとの間に死闘が展開されるというもの。第2作、第3作でボーンの抹殺を指令するのはアボット（ブライアン・コックス）やノア・ヴォーゼン（デヴィッド・ストラザーン）等だったが、本作では新たに「アイアンハンド計画」を目論む老練なCIA長官ロバート・デューイ（トミー・リー・ジョーンズ）がすべてを指揮する立場として登場するので、それに注目！

■□■新登場の美人ハッカーにも注目！■□■

他方、目には目を、歯には歯をと同じく今やハッカーにはハッカーを！それができなけ

ればどうしようもない時代になっている。本作でそれを一手に担うのが、CIAのサイバ一部門の若きエージェント、ヘザー・リー（アリシア・ヴィキャンデル）だ。朝のテレビニュースでも見たこのアリシア・ヴィキャンデルは「イングリッド・バーグマンの再来」と言われる、スウェーデン出身の若き美人女優で、『リリーのすべて』（15年）（『シネマルーム38』43頁参照）や『エクス・マキナ』（15年）（『シネマルーム38』189頁参照）等であつと驚く演技を見せてくれた。本作におけるリーの活躍分野はもっぱらITの世界、ハッカーの世界だから、見せ場はパソコンやキーボードとの格闘になる。したがって、その演技だけではそれほど目立つものではないが、とにかくその美しい顔に注目！

ちなみに、リーは後半の激しいカーチェイスにも少し顔を出す、アクションはほとんど見せてくれない。アンジェリーナ・ジョリーは『トゥームレイダー2』（03年）（『シネマルーム3』278頁参照）で、ミラ・ジョヴォヴィッチは『バイオハザード』シリーズで、ハル・ベリーは『007/ダイ・アナザー・デイ』（02年）（『シネマルーム2』117頁参照）でアクション女優の姿を見せてくれたが、細身で華奢なアリシア・ヴィキャンデルに限ってはそんなことはなさそうだ。

■□■ボーンのIT知識は？セリフは？格闘術は？■□■

IT技術の知識とその活用が必要なことは主人公のボーンも同じで、デモの混乱が続くアテネのギリシャでニッキーと落ち合ったボーンは白バイの後部座席にニッキーを乗せて逃走するが、あえなくニッキーは射殺されてしまうことに。しかし、その直前にニッキーから手渡されたコインロッカーの鍵でロッカーを開けると、そこには最高機密ファイルが記録されたUSBメモリーが入っており、ボーンが町のパソコンショップに入ってそれを解読するところから、本作の本格的ストーリーが始まることになる。そんな展開を見ると、ボーンにもそこそこの（ものすごい？）パソコンの知識があることがわかるが、67歳の私にはそんな能力はとてとても・・・。

また、『007』シリーズのジェームズ・ボンドは腕も立つが、女に甘く、口も達者でおしゃべり。また、『コードネーム U. N. C. L. E.』（15年）（『シネマルーム37』218頁参照）で復活した（？）ナポレオン・ソロはジェームズ・ボンド以上の女たらしでおしゃべりだが、相棒のイリヤ・クリヤキンは無口な実務派。スパイ映画の主人公のキャラはいろいろだ。それに対して、『ボーン』シリーズの主人公ジェイソン・ボーンは無口が取り柄。『男はつらいよ』の主人公であるフーテンの寅さんはしゃべらせておけばただで絵になりストーリーが展開していくが、無口な主人公の場合は何よりも状況設定が大切になる。口ではなく、行動と表情そして結果ですべてを観客にわからせる必要があるわけだ。しかして、本作でマット・デイモン演ずるジェイソン・ボーンがしゃべるセリフは20行ほどしかないらしい。あつと驚く見事なエンディングでも、ボーンのセリフはゼロだからすごい。

もっとも、本作では端的にそのフルネームがタイトルとされたジェイソン・ボーン最大の取り柄は、マーシャルアーツ等を取り入れた格闘術。スパイ映画の王道を歩む『ボーン』シリーズはアクション・シーンや格闘シーンではエンタメ色を排してリアルに徹しているから、本作で見せるジェイソン・ボーンの格闘術に注目！

■□■作戦員のセリフは？実力は？格闘術は？■□■

そんなボーンと同じように、本作でセリフではなく行動と表情そして結果でストーリーを展開させていくのは、本作で新たに登場するCIA作戦員（ヴァンサン・カッセル）だ。リーはいつもデューイのすぐ側でデューイの指示を行動に移しているが、ある時点からはデューイに対してある不信感を持っていることがチラチラと暗示されてくる。それに対して、凄腕の実力を誇る暗殺者である作戦員はあくまでデューイの命令に忠実だが、それは作戦員自身もボーンに対してある恨みを持っているためらしい。そのため、徹底してボーンの暗殺に挑もうとするデューイの意思と思惑が完全に一致しているわけだ。

饒舌な男より口数の少ない男の方がややもすれば魅力的に見えるものだが、それは作戦員も同じ。デューイとリーが陣取る中枢部からの指令を受けて現場へへばりつき、自分の腕のみを信じてターゲットの暗殺を狙う作戦員のホンマモノの実力はそれなりに魅力的で、男の美学に満ちている。

ニッキーを射殺する時もその実力がいかんなく発揮されたが、アテネからベルリン、ロンドン、ラスベガスと移動していくボーンを作戦員はいかに追っていくの？作戦員のセリフの少なさはボーンと同じだし、ラストに見るボーンとの直接の肉弾戦でもセリフはほとんどない。CGをふんだんに活用したファンタジーものやアメコミものの主人公たちが見せる多くのセリフとマンガ的なアクションに対して、本作でボーンと作戦員が見せる少ないセリフと本格的アクションに注目！

■□■国家の安全 v s プライバシー問題をどう考える？■□■

あと1カ月後に迫ったアメリカ大統領選挙では、ヒラリー・クリントンの「メール問題」が解明されないままくすぶっているが、ひょっとしてここから「スノーデン事件」のような問題が出てくるかも……。さらに、女性レイプ問題で窮地に陥ったトランプ陣営からは今後もどんな爆弾が飛び出すかわからないから、そんな想定外のことがありうるかも……。

ちなみに「スノーデン事件」とは、アメリカの国家安全保障局（NSA）がテロ対策として極秘に大量の個人情報を収集していたことを、元NSA外部契約社員のエドワード・スノーデン容疑者が暴露した事件。アメリカの中央情報局（CIA）の元職員でもあったスノーデン容疑者は、香港滞在中の2013年6月上旬、米通信会社から市民数百万人の通話記録を入手したり、インターネット企業のデータベースから電子メールや画像などの情報を集めていたというNSAの情報収集活動を相次いで暴露したため大変な事件となり、

映画化もされている。

そんな時代状況を反映して、本作では新興巨大IT企業ディーブドリーム社の若きCEOアーロン・カルーア（リズ・アーメッド）がアップル社の創業者スティーブ・ジョブズやfacebookの創始者マーク・ザッカーバーグのように、大きな会場で拍手に包まれて登場してくるシーンが映し出されるのでそれに注目！ディーブドリーム社のユーザーは15億人というからすごい。それを活用し世界中の市民を対象にした壮大な監視プログラム「アイアンハンド計画」の実現に執念を燃やすデューイはカルーアに協力を要請したが、そこで懸念されるのがプライバシーの保護だ。国家の安全のためにスパイや犯罪者の監視、摘発が不可欠なことは当然だが、そうかと言って、かつてのソ連のように秘密警察がすべての国民の情報を独占してしまうのはいかなもの。戦前の日本も、特高（特別高等警察）による日本共産党員を中心とする思想統制は過酷を極めていた。国家の安全vs個人のプライバシーは究極の対立だが、CIA長官として今デューイがやろうとしていることは明らかに行き過ぎ。そんな判断でデューイへの協力を拒否したカルーアの感覚は正常だが、さてその報復は？

■□■CIA内部の対立にも注目！新人の台頭はどこまで？■□■

ボーンの父親であるリチャード・ウェッブ（グレッグ・ヘンリー）もCIAの有能なスパイで、暗殺者養成計画たるトレッドストーン計画に関わっていたが、そのリチャードがレバノンのベイルートでテロに巻き込まれる中、ボーンの目の前で死亡したのは一体なぜ？本作中盤は、ボーンがアテネ、ベルリン、ロンドンと移動する中で、少しずつその真相に近づいていく姿が描かれる。またその展開の中で、CIAの秘密を暴こうとするボーンと徹底的に敵対すべきか、それとも説得、懐柔してCIAへの復帰を目指すべきかをめぐる、CIA内部の路線対立（？）が浮かび上がってくるので、それに注目！

そこでボーンの殺害に執念を燃やすのはデューイと作戦員、他方ボーンの復帰を目指すべきと主張するのはリーだが、まだまだ新米のリーにそこまでの発言力があることに驚かされる。CIAにも世代交代が必要なことは当然だが、新米のリーに本作で見るような発言力を持たせたのは、ちょっと行き過ぎかも・・・？しかも、ボーンを追いつめるギリギリの作戦が展開される中で、リーが得意のIT技術（単なるメール？）を活用してボーンを助けるシナリオはちょっといただけない。ひょっとしてボーンとリーとの間に恋心が芽生えているの・・・？そんな邪推（？）さえしかなないが、デューイとボーンとの究極の対決が終了した後、リーはCIAの中でいかなる位置を占めることに？もし次回作が登場すれば、そこでリーはどんな役割を与えられるのだろうか？興味津々だ。

■□■究極の対決はラスベガスで！動と静の展開に注目！■□■

本作ラストに見るデューイとボーンとの「究極の対決」の舞台は、デューイがゲストと

して出席するディープドリーム社のシンポジウムが開かれるラスベガスになる。シンポジウムのテーマは「国家の安全とプライバシー」という興味深いものだが、そこでCEOのカーアはどんな基調報告をするの？またデューイはどんな発言をするの？私は是非それを聞いてみたかったが、スクリーン上ではカーアの暗殺を狙う作戦員がいたから混乱は必至。さらに、ボーンがデューイの命を狙って会場に現れることを想定していたから、作戦員の真のターゲットはカーアではなくボーンであることは明らかだ。

ボーンが易々と国境検問所を通過するシーンには少し違和感があるが、それはさておき、シンポジウムでカーアが射殺された後の逃走劇に見るカーアクションはものすごいのでそれに注目！今やド派手なカーアクションでは「逆行」は普通だが、本作では逃げるボーン的車も、それを追う作戦員が乗った装甲車も逆行の連続だからビックリ！そんなド肝を抜くカーチェイスはラスベガスで有名なカジノの正面に両車両が衝突するシーンで終わるが、それまでの経過は何ともすごい。

他方、追撃を振り切りホテル58階のスイートルームにデューイを求めてボーンが入っていくシーンになると、スクリーンは俄然静かになる。いくらデューイでも1対1の対決でボーンに勝てるわけではない。そこで慌てふためかないのはさすがだが、それ以上に驚かされるのは、そこでボーンのCIAへの復帰を提案するデューイの交渉力だ。なるほど中国もしたたかだが、アメリカも相当したたか。ここでいさぎよく観念し、自分で腹を切るという日本式はいただけないわけだ。この場にボーンが「トレッドストーン計画」の謀略を暴くという目的の他、父親の敵を討つという目的で腹を固めてきたことはまちがいない。すると、後は銃の引き金を引くだけだが、そこでボーンは躊躇するの？それとも冷徹に割り切るの？ボーンのそんな心理を見透かしたかのようなデューイの対応に注目しながら、この究極の対決の行方を見守りたい。

2016（平成28）年10月20日記